

異文化への 懸け橋をねがって

井上 園子



■井上 園子 (いのうえ そのこ)
1931年東京生まれ、湘南白百合学園、学習院女子研究科卒、(有)祥文館(企画、編集、製作)代表。現在は宮沢賢治の童話を児童向けに製作しています。当時5歳の孫にとって、岩手の方言を含む80年前の言葉は理解のほかであったのがきっかけです。

私がイタリアの魔力に引き摺り込まれたのは、塩野七生氏の著書「ルネッサンスの女達」、「海の都の物語」特に「わが友マキアベッリ」などによる中世イタリアへの興味からでした。

そんな私がイタリアを訪れるたびに、何故昼休みが長く観光客の不便を無視するのか、何故おしゃべりなのか等々、素朴な疑問が浮かんできました。

私の現代イタリアに就いての知識は、各分野で活躍されている方達のイタリアに関する著書からでした。しかし実際に現地立つと、読んだものとは「何か違う」と感じていました。それらの本の多くは、イタリアに住んだその人自身の体験談や、聞きかじった事の範囲の記述を出していないように思われたのです。私が知りたかったのは、イタリア半島に住む人達がかかわる日常の全てを動かしている考え方、ものの見方でした。

また、最近のイタリアの旅で、1980年代頃には感じられなかったある変化に気づいていました。毎年、定宿にしているホテルのフロントマンの私への対応です。それまでは再会を喜んでくれていた顔なじみの態度が、少しよそよそしく感じられたのです。理由はあとで解りましたが、昔、日本人の住まいを「ウサギ小屋」と外国人に言われたのと同じようなことが、イタリアで起きていたのです。それは日本の某雑誌社がある統計をとり「世界一愚かな人間はイタリア人」とランクづけをしたそうです。果たしてその様な統計がされたのか、私は未だに疑わしいと思いますが、私の回りの人達も、そんな記事を目にしたことはないと言っています。しかし問題なのは、イタリアのマスコミが、このおかしな記事を紹介してしまった事実です。日本人の住居について外国人にとやかく言われても聞き流せます。しかし「世界一愚かな」と言われた国民にとっては、腹立たしく思うのは当然でしょう。

そこで私は、日本人である私を感じている疑問に対して、直接、イタリア人に答えてもらい、日本人の一方的な偏見を排したイタリアとイタリア人の紹介ができればよいと考えたのです。

幸いなことにうってつけのイタリア人が身近にいました。娘の友人で、我が家の親しい客でもあったイタリア人の哲学者です。1995年当時、イタリアで職探し最中であつた彼には本を書く時間が充分にありました。もし本が出版されれば、彼の研究の購入資金を間接的に援助できる上、イ

タリアを通して異文化への接し方に触れられるのではないかと考えたのでした。

彼は文部省の留学資格を得て京都大学に留学、密教曼荼羅の研究に打ち込み、その後も外語大のアジア研究所に招かれました。従って彼の日本語の能力は古文書を解読出来るほどであり、ウンベルト・エーコの来日時には通訳もしました。

私はまずイタリアに関する各ジャンルの日本人が書いた本、雑誌、新聞の切り抜きをイタリアに送る作業から始めました。次に一般の日本人のイタリアについての疑問のリストを作りました。先に書きました単純な疑問から、軍隊、教育、政治の仕組みやその他に対するイタリア庶民の考え方など多岐にわたったものでした。

イタリアからの一回目のファックスが我が家に届き、そこに書かれたイタリア式日本語を現代の日本語に直す仕事が始まりました。なまじ古文書を解読できる外国人の日本語は難解で摩訶不思議な文章です。まるで謎解きのように何度もファックスでやりとりする毎日でした。まさに本のタイトルになった、『イタリアの考え方』を体験させられる日々でした。

こうして出来上がったいわば無名の外国人の原稿を、物書きである家人の担当編集者に読んでもらい、遂に一流出版社の新書として出版できたのです。最終的には、六刷合計二万六千部になりました。この仕事を完成させられたのは我が家に協力者があつてのことですが、私の小さな疑問から出発した本を読んで下さいました多くの読者の皆様のおかげと今では心からの感謝をしております。そして、少しでもイタリア文化に対する理解の懸け橋となっていれば嬉しく思います。



日本語を作る職人(レッチェ)



制服姿の軍人(レッチェ)